

行方市長
鈴木 周也

J Aなめがた
代表理事組合長 中川 治美

白ハト食品工業 (株)
代表取締役社長 永尾 俊一

「なめがたファーマーズ・ヴィレッジ」プロジェクトによる 行方農業の発展と地域振興

白ハト食品グループとJAなめがた、農業者の出資により、農業生産法人「株式会社なめがたしろはとファーム」を設立され、同社が運営する、農業のテーマパーク「なめがたファーマーズ・ヴィレッジ」が、廃校となった大和3小の跡地を利用して今年の秋にオープンします。

今号では、鈴木市長がコーディネーターを務め、白ハト食品工業の永尾俊一社長とJAなめがたの中川治美組合長に、これまでの経緯や事業内容、今後の可能性について対談いただきました。

市長…このようなビックプロジェクトが、「なぜ、行方に？」と思われる方はたくさんいると思います。白ハト食品とJAなめがたの関わりについてお聞かせください。

永尾…日本国内で販売されている大芋の80%は、当社の商品であり、トップシェアを占めています。さつまいもはとてもおいしく、食物繊維が豊富で女性にも人気があります。安心安全でおいしいさつまいものお菓子を提供するためには、良い工場、安心して生産できる工場、品質の高いさつまいもの産地とのつながり（生産者・農協）を持つことにより、安心・安全・安定したさつまいもを確保することが重要です。全国トップクラスのさつまいもの生産を誇るJAなめがたとプロジェクトを進めることとなり、光栄に思っています。

中川…平成17年に「おいも株オーナー制度」を開始したのがきっかけです。

平成20年には、白ハトグループの宮崎工場、神戸工場の視察を行い、加工も視野に入れた出荷体系の必要性を強く認識しました。その後の信頼関係の構築により、同社との取引量は年々増加し、平成25年度には、宮崎工場約千二百トンを出荷しています。宮崎工場や神戸工場で加工されたスイーツなどの商品が首都圏で販売されていることを知り、行方にさつまいもの加工工場を作ればお互いメリットが出るのではないかと考えたのが、「ファーマーズ・ヴィレッジ構想」の原点です。



スカイツリー金時収穫祭 (東京都墨田区)



紅こがね収穫祭 (行方市島並)

日本一を目指します

市長・永尾社長は、日本初の「体験型農場テーマパーク」であると話されています。具体的にどのようなものなのでしょうか？イタリア料理のレストランをオープンしたいとの意向もあるようですが、これらを含めて、事業の概要についてお聞かせください。

永尾・ファーマーズ・ヴィレッジは、たくさん日本一を作ります。工場棟では、大学いも、焼き芋、干し芋の日本一の工場を作りたいです。

大和三小の校舎は残してありますので、校舎に、日本初の焼き芋ミュージアムを作ります。焼き芋と日本人のつながり、なぜ焼き芋がこんなにおいしいのか、焼き芋の未来は何なのか、焼き芋の奥深さを、子どもから年配の方まで、皆さんが楽しく学んでもらえるようなミュージアムを作りたいと考えています。

商業棟では、道の駅と同じような機能を持った施設を建てます。ここには、焼き芋をベースにした日本一の焼き芋売り場、焼き芋をパウダーにして作った出来たてのパン屋さんや行方産野菜をたくさん、ヘルシーに食べられるイタリアンレストランをオープンする予定です。また、周辺にある耕

作放棄地を活用して体験型農場を作り、首都圏の方に農業を体験いただきたいと思っております。

なめがたファーマーズヴィレッジプロジェクトマップ



商業棟 →
建築デザイン・インテリアの空間イメージ



年間3千トンを生産

市長・さつまいも工場を稼働している中で、相当量のさつまいもが必要になってくると思いますが、JAなめがたとして、さつまいもの確保について、どのように考えていますか？

中川・行方工場が稼働となると、新たに約3千7百トンのさつまいもが必要となります。これまでは、青果用さつまいも（市場出荷）の規格外取り引きがメインでしたが、今後は規格外だけではなく、新たに加工用さつまいもの栽培を強化していきたいと考えています。そのためにJAとしては、受け皿となるキュアリング貯蔵施設の新設を行い、原料を秋季の収穫と同時に生産農家から集約できるようにします。また、加工用さつまいも栽培においては、新規の部会員も見込んでおり、平成30年までに管内産のさつまいも取り引きを年間3千トンまで伸ばす計画です。

永尾・グループ全体で年間7千トンを確保していますが、それでも足りない状況です。スーパーの話では、青果売り場での野菜単体の売上げが落ちている反面、加工用の原料が増えているようです。JAなめがたに加工用を強化していただけることは、

心強いです。私たちは皆さんに喜んでいただけるよう、商品開発に努めます。

さつまいもの経営安定基盤確立

市長・今回のビックプロジェクトについて、JAなめがたとしてのメリットをお聞かせください。

中川・第1に行方の基幹作物であるさつまいもの経営安定基盤が確立できることです。今後推測される担い手減少・高齢化への対応策として、青果用とは別に、加工用さつまいも栽培を強化することで、新たな担い手の育成、それに伴う産地規模の拡大、販路の多様化による農家の所得向上、無選別・無洗浄での出荷による労働時間の大幅な軽減等の効果が期待されます。

第2にさつまいもとどまらず、その他の青果物に関しても新たな販路が見込め、相乗効果が期待できることです。現在、農畜水産物を使った加工品を試作しているほか、施設には直売所や加工品の販売店舗を併設する計画です。

第3に雇用創出など地域活性化につながることで、地域全体の参加によって、町おこしや観光客の呼び込みにつながれば、JAとしての地域貢献の役割を果たすことができます。



強い農業を目指して

約150名の新規雇用

市長：地元雇用についてのお考えはありますか？

永尾：150名くらいの新規雇用を考えています。行方市民の皆さまなどを中心として多くの方に働いていただきたいと思います。

行方市が進むべき農業

市長：行方市の農業従事者は、年々高齢化が進み、就農人口も減少しています。今回のプロジェクトは、行方市の基幹産業である農業を、維持・発展させていく上で、大いに期待しております。この好機にあたり、市や農業者が今後、何をすべきか、お二人に率直



日本一のファーマーズ・ヴィレッジを目指して

なご意見をお伺いします。

中川：儲からなければ、地域農業の衰退は避けられません。5年後、10年後も安定して利益が確保できる「強い農業」を構築することが重要です。そのためには、さつまいもを中心にブランド化を進め、販売を伸ばし、消費者に喜んでもらえる高品質なものを安定供給していく必要があります。若い後継者はほとんど規模拡大ができ、高齢者は少しでも長く栽培が続けられる環境づくりをJAとして考えていかなければなりません。

永尾：行方大好き、行方に行きたい、行方に住みたいと思う方を増やしていくことが重要です。行方の持つ自然の良さ、住んでいる方の良さ、土の力、それが農業という基幹産業になつていきます。さつまいもを加工して販売するだけではなく、行方だからこそできる良さを、さつまいものお菓子と一緒にして、全国の皆さんに提供することにより、行方市を訪れる方が増えると思います。

市長：6次産業化を推進し、地域活性化につなげていけば、国の進める地方創生に合致すると思います。市としても行方市が住みやすいまちであるということを強調していきます。



市民の皆さまへのメッセージ

市長：なめがたファーマーズ・ヴィレッジがスタートすることは、市にとりましても、新たな展望が開かれるものと期待するところです。今回のプロジェクトにあたって、お二人から市民の皆さんへメッセージをお願いします。

永尾：今年秋の開業に向け、準備を進めています。絶対に成功するという強い思いと、白ハトグループだけではなく、JAなめがたと行方市、行方市民と共に、日本一、世界一のファーマーズ・ヴィレッジを目指していきたいと思えます。私たちも精一杯がんばってまいりますので、ご理解ご協力をお願いいたします。

中川：農業問題がクローズアップされています。農協改革は上からの押しつけではなく、自己改革をしなくてはならないと思っています。儲からなければ後継者は育ちません。このような工場ができることによって、自ら目標を

6次産業化の推進を目指して

定め、自分の計画に合った立案ができるようになり、安定した収入が得られます。そうすれば後継者が必ずできますし、それが組合長の使命だと思っています。皆さんの期待に応えられるようこれからもがんばってまいります。

市長：農業の進む道は難しい時代に入りました。今まであったものをいかにして組み立てるか、そしてどのようにつなげていくかがポイントになります。地域貢献や雇用創出も同じです。日本一世界一を目指し、「行方市は胸を張れるまち」であることを子どもたちにも伝えることが重要ですので、市民の方に胸を張れるようなプロジェクトにしていきたいと思います。

